

幼児における笑いの発達

—— Smile と Laughter の違いに着目して ——

高 木 尋 子

問題と目的

子ども達の笑顔を見るとこちらまで嬉しくなり、つい笑顔になってしまう。そのような魅力的な笑顔子ども達はいつから持っており、またそれはどのように変化するのだろうか。

誰もが微笑み返してしまうような笑顔と言うと、我々はまず生まれて間もない乳児の微笑 (Smile) を思い出す。Bowlby (1969) はその Smile をヒトという種における特有な愛着行動の一つとして捉えている。そして今日では、Smile は生まれる前の胎児の段階から出現しており、愛着行動としての Smile (人の顔を見つめて表れるもの) に至るまでにいくつかの発達過程を経ている (高橋, 1995) ことも明らかにされている。

また笑顔には Smile ばかりではなく、「ハッハッハ」と声を上げる笑い (Laughter) もある。この笑いは、およそ生後4ヶ月に出現する (正高, 1995)。これらはいずれも学習によるものではなく、生得的に備わっている表情行動であると考えられる。そのことは、盲目で生まれて他人の表情を知り得ない場合でも、泣いたり笑ったりという表情が認められることや、ヒトの祖先であるサルにヒトの笑いの原型が見られる (Van Hooff, 1972) ことから推察できる。

ところで、初期の頃の Smile や Laughter は、睡眠中に表れたり、くすぐられて表出したりと「リラックスした快」や「身体的快」といった「快」の表現が主体である。しかし、幼児期以降には必ずしも快とは関係しない「挨拶の笑い」や「おかしさに対する笑い」などが加わってくる。つまり、生得的なものに社会的意味も伴ってくるというわけである。このように、笑いの持つ意味は成長するにつれて多様になっていくと言える。

しかしながら、笑いについての研究と言えば、成人に関するものか、前述した乳児の Smile に関するものがほとんどで、意味が多様化し始める幼児期のものはあまり行われていない。少数の幼児期に焦点を当てた研究も、笑いという行動をユーモアやコメディを正しく認識するための子どもの発達のキャパシティを見る指標として用いる認知的アプローチのものがほとんどで、笑いそのものに焦点が当てられている研究はほとんど見当たらない。快の表現として表れた笑いは、社会的意味を伴うものも出現してきてから、どのように変化する

のであろうか。そこで本研究では、社会に触れ始める幼児期の笑いに焦点を当て、その発達の様相を検討したい。

これまでに成人の笑いについての研究は多くなされており、そこからはいくつかの笑いの理論が生み出されている。伝統的な理論は次の3つ (Morreall, 1983) である。一つ目は、笑いは他人に対する優越感の表現だとする、優越の理論である。二番目はズレの理論で、これは概念間で突然不調和が知覚されたときに笑いが表れるという説である。第三の理論は、放出の理論である。笑いとは神経のエネルギーの発散であるというのが主な考えで、Freud (1948) も抑圧からの解放として笑いを精神分析理論に組み込んでいる。そして近年になって、Morreall 自身が笑いについての新しい理論を打ち出している。それは、突然の変化（これを彼は「転位」と表現する）が笑いへと導くという包括的理論である。これは一見するとズレの理論と似ているが、明らかに違う点は Morreall の理論は概念だけに限らず、感情や感覚・認知的転位という考えで、非ユーモア的な笑いについても説明することにある。しかしこの理論では、Laughter の説明はできても Smile に関しては十分適用できないことがわかる (ex. 挨拶の笑い)。Morreall は Smile と Laughter を質が異なる笑いとして見ているのであろうか。

しかしながら、これまでの笑いに関する研究で Smile と Laughter を明確に区別したものは、ほとんど見当たらない。多くの研究は Smile の役割や Laughter 特有の呼気などを強調することで、その2つを暗黙のうちに区別しているか、あるいは Smile と Laughter は同質のもので、ただ単に表出レベルが異なるだけであるという考えなのである。つまりそれらが質的に見て異なる表現である、とする考え方は全くとられていない (Bainum, Lounsbury & Pollio, 1984)。

Smile と Laughter は同種のものであるだろうか。しかし、2つの違いを示唆する考え方をとる研究者もいる。動物行動学的視点から見た笑いに対する考えで「ほほえみについてはそれを『だまって歯をむき出すディスプレイ』が完全に自由化したものとして、また笑いについては『くつろいで口をあけるディスプレイ』の一型であると考えることができる。(中略) 霊長類の系統発生の中では、まったく異なる2つのディスプレイに関係していると思われる」(McForland(Ed), 木村(監訳), 1993, p635) というものである。

この問題を調べるために、Bainum et al. (1984) は Smile と Laughter を分けた上で、幼児のそれらの出現頻度や取り巻く状況を観察、分析している。しかしその結果では、Smile と Laughter の頻度の違いや年齢による違いは明らかになっているが、2つが同じ反応でただ表出レベルが違うだけなのか、それとも全く異なる反応なのかについては、はっきりした結果が出ていない。これは、笑いを観察するときに「ユーモラスなできごとと共に生じた笑い」だけに絞ったことが影響しているのではないだろうかと考えられる。また、そのカテゴリー分けも Smile と Laughter が同質なのか否かを見るには不十分であると考えられる。そこで本研究では、保育園において4～6歳児の園児の自由遊び場を自然な状態で観察し、笑った

ときの状況を文脈もわかるように記録することにした。笑いについては、ユーモアが生じたかどうかは関係なく、笑ったという事実に基づいたエピソードを記録し、そこから年齢による笑いの変化や Smile と Laughter の出現頻度の違いなどを吟味する。そのために、新しいカテゴリーを作成し、この問題を検討する。さらに、発達過程の視点も含めて考察したいと考える。

以上をまとめると、本研究の目的は、①4～6歳の幼児期における笑いを観察し、笑いの出現頻度は年齢や状況によって変化するのか、②その笑いを Smile と Laughter に分けたとき、何か違いが明らかになるのかを検討し、③さらにそこから Smile と Laughter が同じカテゴリーの反応なのか異なるものなのか、についても言及することにある。

方法

対象児 小田原市内の公立保育園に通う園児30名。内訳は、年少・年中・年長組に属するそれぞれの園児から、男女5名ずつが無作為に抽出された。各組ごとの平均年齢は、観察開始時点で、4.1歳、5.0歳、6.0歳であった。この保育園は各学年1クラスで構成され、クラスごとの人数は、年少組31名、年中組39名、年長組25名であった。

観察期間 1995年9月6日～11月10日の期間に、週2、3回の割合で観察。

観察手続き 観察期間に先立ち、著者は園児達と親しむためと、目的とする観察が実際に可能であるかを確認するために、7月下旬から3回保育園に通い、園児達と共に過ごした。

観察は園児達が自由遊びをしている時間中に行われた。自由遊びの時間は、室内遊びの場合は園児達が登園してくる9時頃から設定保育に入るまでの間と午後の設定保育が終わってから帰るまでの間、外遊びは毎日10時頃から約1時間であった。各々の子どもにつき、室内遊びと外遊びとを分けて、それぞれ10分間ずつ観察を行った。その際、観察者である著者からは子どもに対して積極的な働きかけは行わないが、子どもが求めてきた場合はそれに応じながら観察するという、参加観察法を採用した。

また記録方法は、遊び場面で生じた笑いについて、観察者がその文脈と共にその場で書き取る形で行った。本研究は、個人観察という制約を受けながらも、ビデオ撮影などを用いない、できる限り自然な形で観察記録を採取することを心がけた。

観察するにあたって、特別なカテゴリーは用意しなかった。その理由に、本研究が幼児の笑いに関して探索的研究であることが挙げられる。既製のカテゴリーや頭の中で考えたカテゴリーを用意すると記録が偏ってしまう可能性があると考えたためである。そのため、全ての園児の観察が終了した後、カテゴリー分けされ、分析された。

笑いの指標 笑いの指標となるものは2つある。一つは顔の表情で、いくつかの表情学的要件で示される。もう一つは、笑いが様々な筋肉や神経の変化によって構成されている(志水・角辻・中村, 1994)ことから、その変化が指標となる。前者は主観的判断によるところが大

きく、また表情には個人差があるため判断が一定しにくいという弱点があるが、一方で大がかりな装置が必要ないという利点がある。後者は、科学的測定が可能で客観性という点では優れているが、動き回っている場合の測定には難点がある。本研究では、園児達の遊んでいる場面を自然な形で観察することが必要だったので、顔の表情を笑いの指標とした。厳密に言えば笑いの表情学的要件はいくつかあるのだが (e.g. 安田, 1984)、本研究では短時間のうちに記録を取らなくてはならなかったので、口角が上の方へ上がっているという点を大きな基準として、笑っているか否かを判断した。このような基準の下、得意そうな表情、恥ずかしそうな様子なども含めて、笑いに関する記録は、その子どもが何をしているか、誰と一緒にいるか、笑ったときの発声の有無や口の形に留意しながら文章の形で書き取られた。

カテゴリー分類 記録されたエピソードは、次の定義に従ってカテゴリー分けされた。

① 笑いの種類：笑いが Smile か Laughter か。

- a. Smile——口角が後方に引かれ、上に曲がる。発声は伴わない。口が開いていたり、歯が見えていても構わないが、歯が上下完全に離れているものは Smile とはしない。
- b. Laughter——音声（スタッカートのような速い呼気）の聞こえるものは全て Laughter とする。また笑い声が伴っていなくても、歯が上下完全に離れるほど口を大きく開けたものも含む。 (Jones, 1972を参考)

② 遊び場所：観察された際の遊び場所は外か室内か。

- a. 外遊び——園庭で遊ぶ。外遊びはどの学年もほぼ同じ時間に行われる。
- b. 室内遊び——教室内で遊ぶ。各学年、教室の広さは同じ。室内遊びの時間は、他の学年との交流はない。

③ 遊び道具：何をして遊んでいる最中に笑いが生じたか。

- a. 道具あり身体活動——輪や縄跳び、三輪車など道具を用いて遊ぶ。
- b. 砂・ままごとセット——砂場で山や川を作ったり、ままごと用のお皿などに砂を盛るといった遊び。
- c. 固定遊具——すべり台、ブランコ、鉄棒などの大型遊具を使って遊ぶ。
- d. ブロック——ブロックを組み立てたり、ブロックで作った銃を使って遊んでいる。また、小さなおもちゃを使って遊んでいるものも含む。
- e. 創作——粘土細工やお絵かきといった創作活動。
- f. 身体的活動——特に何の道具も使わないで、走る、踊る、追いかけるといった遊び。
- g. 物語を作る——自分（達）で物語を作って遊ぶ。例えば冒険物語のストーリーの中で走るなどはここに含まれる。
- h. ゲーム——じゃんけんやいす取りゲームをして遊ぶ。
- i. 他の友達の様子を見る——自分は特に何もしていない。
- j. 話す——他の園児と話している。

k. だっこ・おんぶ——抱きついたり、おんぶしてもらったりしている。

(a～c は外遊びのみ、d, e は室内遊びのみ、f～k は外、室内共通のもの)

以上11項目にエピソードを分類したところ、外遊びは砂・ままごとセットと固定遊具に、室内遊びはブロックと創作のそれぞれ2項目に特徴が見られた。よって、残りの項目はまとめて「その他」として分析した。

④ 社会的関係：笑いが生じたときに周りの人との関わりはどうであったか。

- a. 一人——観察対象児が一人で独立に遊んでいる。あるいは、そばに他の園児がおり、似たような遊びをしているが相互作用は全くと言っていいほどない、つまり一緒に遊んではいけない平行の状態も含まれる。また他の園児の遊びを見てはいるが、本人はそれに参加していない場合もここに属する。
- b. 仲間——対象児が他の園児と行動上の相互作用を持ちながら遊んでいる。ここで言う相互作用には、会話する、互いに他を追ったり逃げたりする、身体接触がある、それぞれの役割がある組織化された遊びをする、などが含まれる。
- c. 大人——大人と一緒に遊んでいる。同時に仲間との関わりがある場合でも、笑いの生起に大人の存在が大きく関与しているものは、こちらに含まれる。

(Jones,1972; Bainum et al., 1984を参考)

⑤ 場面：どのような行動・状況に反応し笑いは生じたのか。

- a. 社会的挨拶——人との関わりがきっかけとなったもの。人に何かを頼むとき、人の名前を呼ぶとき、自分が作ったものを人に見せるとき、断る、人をからかうなどが含まれる。
- b. 社会的遊び——人との関わりがあるが、それが遊びとなっているもの。ふざける、ブロック銃を撃ち合うなどである。
- c. 達成——何かを達成したり、その予感のあるもの。勝つ、発見する、作る、できあがる、何かに取り組む直前、といったもの。
- d. 感覚——身体の感覚的・運動的なものがきっかけとなったもの。踊る、揺れる、ハッと驚くなどがここに入る。

場面についての4つのカテゴリーは、まず笑いがどのような行動に付随して生じたかを下位分類し、次に同じ種類と思われるものをまとめていく手法を取った。この作業は2名で行い、最終的に上の4つがパラレルな関係にあると判断した。

なお、一部のデータについて、作業者以外の大学院生1名にも4つの定義に従いカテゴリー分けしてもらったところ、83.6%の一致率を得たので、カテゴリーの分類は安定性を持つものと判断した。

結果

1 笑いの出現頻度について

Smile と Laughter とを区別する前の笑い全体について、まず遊び場所別に見た出現頻度の平均値および標準偏差を表 1 a に示した。3 (学年：年少・年中・年長) × 2 (性：男・女) × 2 (遊び場所：外遊び・室内遊び) の 3 要因分散分析を行った (前者 2 要因は被験者間要因、残りの 1 要因は被験者内要因。以下の 3 要因分散分析も同様) 結果、学年 × 遊び場所の交互作用が有意であった ($F(2,24)=4.41, P<.05$)。特徴として、年少児は他の学年と違って、外遊びでの笑いの出現頻度が室内遊びより少ない。

次に、外遊び、室内遊びの際に、遊び道具に応じて笑いの出現頻度に違いがあるかを見た、遊び道具別の出現頻度の平均および標準偏差を表 1 b に示した。外遊びでの笑いの出現頻度について、3 (学年) × 2 (性) × 3 (遊び道具：砂・固定遊具・その他) の 3 要因分散分析を行ったところ、学年の主効果が有意となり ($F(2,24)=3.90, P<.05$)、学年 × 遊び道具の交互作用も有意な傾向 ($F(4,48)=2.53, P<.10$) であった。つまり、外遊びでは年齢が上がるにつれ笑う頻度が高くなっている。また道具別に見ると、年少児は砂・ままごととセットに関わる笑いが多いのに対し、年中・年長児になると固定遊具やその他における頻度が高くなっている。室内遊びに関しても同様に、3 (学年) × 2 (性) × 3 (遊び道具：ブロック・創作・その他) の 3 要因分散分析を行った。その結果、遊び道具の主効果が有意であり ($F(2,48)=6.64, P<.01$)、外遊びと同じく、学年 × 遊び道具が有意に近かった ($F(4, 48)=2.36, P<.10$)。

表 1 笑いの出現頻度の平均値と標準偏差

		年 少		年 中		年 長	
		男児	女児	男児	女児	男児	女児
a. 遊び場所別	外遊び	2.0<1.22>	2.4<1.52>	3.8<1.64>	3.0<1.41>	4.2<1.64>	3.6<1.34>
	室内遊び	4.4<1.52>	3.2<1.10>	3.0<1.41>	3.0<1.87>	3.4<0.89>	3.4<1.52>
b-1. 外遊び 道具別	砂	1.4<1.34>	1.8<1.64>	1.0<1.41>	0.2<0.45>	0.6<1.34>	0.2<0.45>
	固定遊具	0.0<0.00>	0.2<0.45>	1.2<1.30>	1.0<1.00>	1.8<2.49>	1.2<1.64>
	その他	0.6<0.89>	0.4<0.55>	1.6<1.95>	1.8<1.30>	1.8<1.67>	2.2<1.92>
b-2. 室内遊び 道具別	ブロック	2.4<1.67>	1.6<1.52>	1.6<1.52>	0.8<1.30>	0.4<0.89>	0.4<0.89>
	創作	0.0<0.00>	0.0<0.00>	0.8<1.79>	0.2<0.45>	1.0<1.41>	0.6<0.55>
	その他	2.0<0.71>	1.6<1.82>	0.6<0.89>	2.0<1.41>	2.0<1.58>	2.4<1.67>

() 内がSD

2 笑い和社会的関係

社会的関係別に外遊びと室内遊びでの笑いの出現頻度の違いを図 1 に示した。社会的関係について、外遊びと室内遊びを分けて 3 (学年) × 2 (性) × 3 (社会的関係：一人・仲間・大

人)の3要因分散分析を行った。その結果、どちらも社会的関係の主効果が有意となったが(外: $F(2, 48) = 6.19, P < .01$, 内: $F(2, 48) = 17.03, P < .001$)、外では学年の主効果も有意であった($F(2, 24) = 3.19, P < .05$)。また、学年×社会的関係($F(4, 48) = 2.10, P < .10$)、性×社会的関係($F(2, 48) = 2.73, P < .10$)、学年×社会的関係×性($F(4, 48) = 2.22, P < .10$)がそれぞれ有意に近かった。その中で、年長児が断然仲間との関わりの中で笑いの出現頻度が増えていることが特徴的である。一方室内遊びにおいては、学年×性×社会的関係の交互作用がほぼ有意であった($F(4, 48) = 4.24, P < 1.0$)。この結果より、室内においては年少児の仲間との関わりの中で生じる笑いは、他の学年とあまり変わらないことがわかった。また、年中の女兒の笑いの頻度が、仲間く大人となっており、他の学年と傾向が異なる。

図1-a 社会的関係別 外遊びの笑いの出現頻度の違い

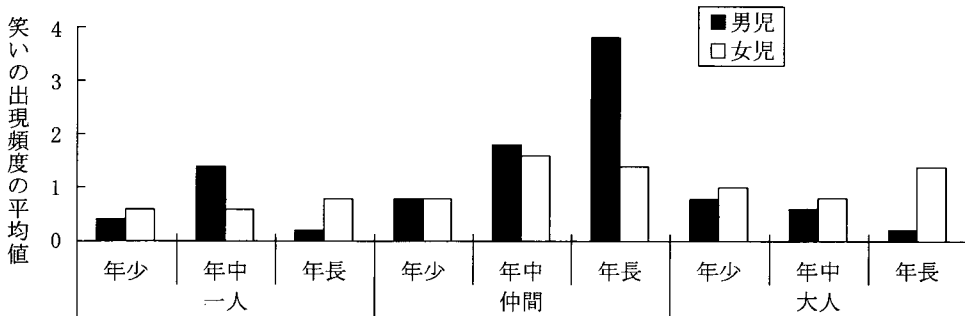
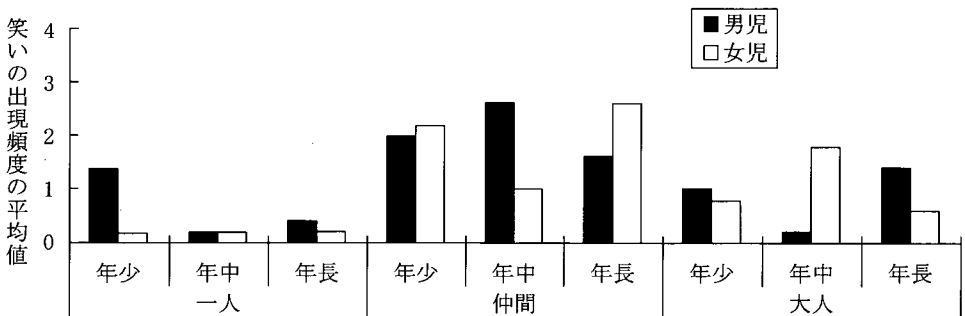


図1-b 社会的関係別 室内遊びの笑いの出現頻度の違い



3 Smile、Laughterそれぞれの出現頻度について

Smile・Laughterの遊び場所別に見た出現頻度の平均値および標準偏差を表2に示した。Smile、Laughter別に3(学年)×2(性)×2(遊び場所)の3要因分散分析を行った結果、Smileに関しては、学年×遊び場所の交互作用が有意であり($F(2, 24) = 3.74, P < .05$)、年中児が室内遊びにおける出現頻度が少ないことがわかった。Laughterは3要因の交互作用が有意($F(2, 24) = 3.59, P < .05$)となり、また外遊びのときに男児と女児に違いがありそうだ(F

(1, 24) = 3.38, $P < .10$)ということが明らかになった。女兒は外、室内でも学年でも出現頻度にさほど差がないが、男児においては、外遊びでは年長が、室内遊びでは年少の出現頻度が高く、性と Laughter に何か関係があることを示唆していると考えられる。

表 2 Smile・Laughter の出現頻度の平均値と標準偏差

		年 少		年 中		年 長	
		男児	女児	男児	女児	男児	女児
a-1. 遊び場所別	外遊び	0.8(0.84)	1.8(2.05)	2.6(1.52)	2.2(1.64)	1.6(1.52)	2.8(0.84)
	室内遊び	2.4(1.67)	2.5(1.14)	1.8(1.30)	1.8(0.84)	3.0(1.00)	2.0(0.71)
a-2. 遊び場所別	外遊び	1.2(1.10)	0.6(0.89)	1.2(0.84)	0.8(0.84)	2.6(1.34)	0.8(0.84)
	室内遊び	2.0(0.71)	0.6(0.55)	1.2(1.30)	1.2(1.30)	0.4(0.89)	1.4(1.14)

() 内がSD

4 笑いの種類と場面

場面別の Smile・Laughter の出現頻度の違いを図 2 に示した。場面と笑いの出現頻度の関係を見るために、Smile、Laughter 別に 3 (学年) × 2 (性) × 4 (反応：社会的挨拶・社会的遊び・感覚・達成) の 3 要因分散分析を行ったところ、それぞれにおいて、場面の主効果が有意であった (Smile : $F(3, 72) = 24.89$, Laughter : $F(3, 72) = 9.81$, すべて $P < .001$)。しかし、Smile と Laughter では頻度の変化が異なることに注目したい。分析の結果、出現頻度の割合が、Smile では、社会的挨拶 > 達成 > 社会的遊び = 感覚、Laughter では、社会的遊び = 感覚 > 社会的挨拶 = 達成となっていることが明らかになった。

図 2-a 反応別 Smile の出現頻度の違い

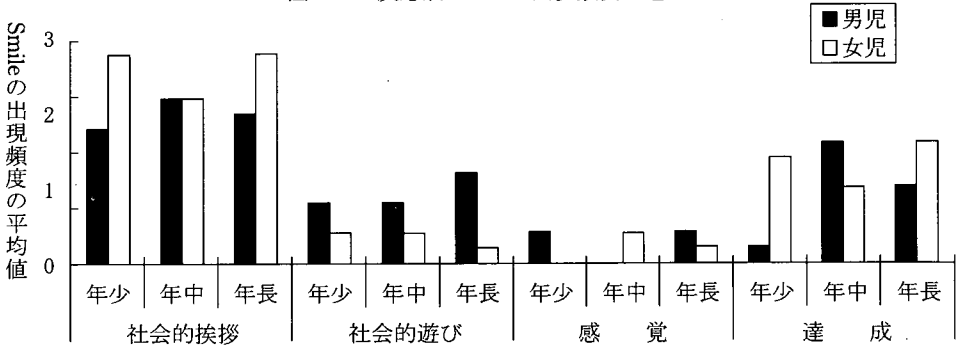
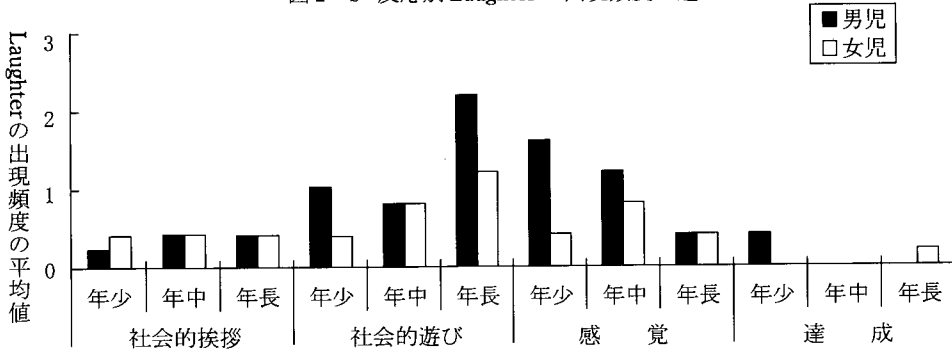


図 2-b 反応別 Laughter の出現頻度の違い



以上をまとめると、結果には次のことが表れている。

- 遊び場所別笑いの出現頻度を比べると、年長・年中児は外の方が多いのに対し、年少児は室内の方が高かった。
- 外遊びにおける笑いの出現頻度が、年齢が上がるにつれて増加する。
- 外遊びでは、年少児は砂・ままごとセットに関わっているときの笑いが多いのに対し、年長児ではそれは減り、代わりに固定遊具、その他においての頻度が高くなっている。室内でも、年少児と年長児では出現頻度の高い遊び遊具が異なっていた。
- 社会的関係では、どの学年も仲間との関わりにおいての笑が一番多かったが、男女別に見ると女児は男児と比べて「仲間」が少なかった。さらに外と室内を分けて見ると、外では「仲間」の頻度が年齢に応じて上がっている、しかし、室内ではむしろ年少児の方が、年長男児と比べると多いくらいであった。また、大人との関わりにおいての笑いの頻度は、男児より女児に多い傾向があった。
- 笑いを Smile と Laughter に分けて頻度の変化を見たが、どちらとも学年の主効果は出なかったが、Laughter は性との関連性が見出された。
- 社会的挨拶と達成においては、Smile の頻度が、社会的遊びと感覚においては Laughter の頻度が有意に高かった。

考察

笑いの出現頻度について

結果よりいくつかの点が明らかになった。まず、結果 1 より笑いの頻度は全体的に見ると年齢による差はないが、遊び場所別に見ると年齢に応じて頻度が変わっている点である。年長・年中児は室内遊びより外遊びにおいての方が頻度が高いのに対し、年少児はその逆である。なぜこのような交互作用が生じたのであろうか。外遊びにおいての結果より、年少児の笑いの少なさが影響していることがわかる。そこで次に、外で何をして遊んでいる最中の笑

が多いのかという結果を検討すると、年少児は砂・ままごとセットでの頻度が多いが、年中・年長児は固定遊具、その他においての笑いが増えている。このことは、各学年の子ども達がそれらで遊んでいる時間の割合はどの程度であるか、というデータが本研究の観察記録からではわからないので推察となるが、次のことが言えるのではないだろうか。年齢に応じて笑いの生じる遊びが異なるということではなく、年少児は砂場で遊ぶ時間が長く、年齢が上がると固定遊具やその他のもので遊ぶ割合が増えるというように、その道具で遊んでいる時間が変化してくる、別の言い方をすると遊びが変化してくる、ということである。そう考える理由として、友定（1993）が1歳児でもすべり台を降りるときに笑うことを観察しているように、年少児でも固定遊具で遊べば笑うであろうと思われるのに、実際には固定遊具での頻度が少ないからである。つまり、遊びによって笑いを作り出す要因を多く持っているものと持っていないものがあると考えられる。今後、ある遊びをしている時間を一定に観察し、その中で笑いの出現頻度はどのくらいであるか、といった研究をすることが必要である。

笑いと社会的関係

外遊びにおいて年少児の笑いの頻度が少ない点については、社会的関係の視点からも考察してみたい。社会的関係では、どの学年も仲間との関わりの中での笑いが多い。しかし、遊び場所別に見てみると、年少児は外では「仲間」での笑いが他の学年よりも少ない。室内遊びではそういったことは見られないことから、年少児では仲間との関係を作る力が十分に発達していないために、室内と違って空間の広い外では仲間との関わり自体が少なくなることが考えられる。

これらのことから、笑いの出現頻度の変化には、年齢そのものでなく、年齢に応じて発達する周りの状況と関わる能力が影響を与えていることが窺える。それは『『笑い』は環境に対する主体の関わり方の表出あるいは表現』（友定、1993）であるからだろう。

Smile、Laughter それぞれの出現頻度について

ここでは、笑いを Smile と Laughter に分け、それぞれの出現頻度は年齢や状況に応じて変化が見られるか、ということについて検討する。結果2にあるように、Smile も Laughter も学年の主効果は出ておらず、出現頻度が年齢に応じて変化するということはなく、笑い全体の結果と同じであった。これは、3歳児は4、5歳児よりも Laughter が少なく、5歳児は小さい子より Smile が少ないとする Bainum et al. (1984) の結果とは異なる。Bainum らは、認知的発達と関係の深いユーモラスな出来事に対する笑いに限って調査しているが、本研究では様々な笑いを対象としており、このことが結果の相違に繋がっていると考えられる。

学年以外の結果でも、笑い全体と Smile、Laughter 別の結果は大きく変わる点はなかった。しかし、Laughter においてのみ見られた結果もある。性差についてである。Laughter の出現頻度を従属変数とした分析結果には、笑いや Smile には見られなかった性別の要因の影響が出ている。例えば、外においてはどの学年も男児の方が女児よりも Laughter の頻度が高い。

その中でも年長男児の頻度は極端に多い。その他の男児、女児は外と室内での頻度を見ると、同じくらいかあるいは室内の方が多いのに対し、年長男児の Laughter 頻度は外＞室内なのである。また室内遊びにおいても、学年と性別の交互作用が有意になっている。ここでは年少男児の頻度の高さが影響している。このように Laughter は女児よりも男児の方が多く出現する人が多いのである。そうなる理由として考えられるのは、男児と女児の遊びの違いである。結果 4 より Laughter は社会的遊びや感覚に反応して生じることがわかっている。その社会的遊びや感覚とは、つまりプロレスごっこであったり走り回ったりということなのだが、そういった Laughter を生じさせるような遊びが女児には少ないと思うのである。実際に、プロレスごっこのような接触遊びは女児よりも男児の方が有意に多いことは古くより報告されている (e.g. Smith & Connery, 1972)。

Laughter についてももう一つ、男児におもしろい結果が出ている。外と室内で Laughter の出現頻度を比較すると、年長児では外＞室内、年中児は外＝室内、年少児は外＜室内と変化している点である。年少児が室内で多いのは、やはり仲間との関わりが外よりも持ちやすいからであろうと思う。一方、年長児が室内で少ないのは、先生より教室内では暴れないように言われているためであろう。その分、外では思い切り体を動かし、また外でも十分仲間と関わるができる社会性を発達させているので、Laughter が生じるような遊びが増え、結果として Laughter も多く出現するようになるのだと考える。

これらの結果から、やはり Smile や Laughter の出現についても、周りの状況との関わり方が影響していると言えるであろう。

笑いの種類と場面

これまでは、社会的関係であるとか、遊び道具といった客観的状況から笑いについて見てきたが、ここでは主体のどのような行動に付随して、どのような笑いが出現したか、という観点から考察しようと思う。

結果 4 にあるように、社会的挨拶と達成という状況には Smile が多く出現し、Laughter は社会的遊びと感覚に付随して表れることが明らかにされた。このように分かれることは、Smile と Laughter が異なる反応であることを示唆しているように思える。

友定 (1993) は笑いを「同質なものに対する笑い」と「異質なものに対する笑い」の 2 つに分け、ピアジェの「同化」と「調節」の概念で笑いのメカニズムを説明する。そして Smile は同質性に基づく笑いに多く、Laughter は異質感に基づく笑いに多いと述べている。この Laughter に対する記述は、Morreall (1983) の「転位の理論」と非常に似ている。本研究の結果をこの考えに基づき検討してみると、社会的挨拶や達成は“何かを頼む、応答する、わかる、完成する”というように自分の持ち合わせている認識の枠組に取り込むことができる行動であり、同化に繋がる。一方、社会的遊びや感覚には、予期せぬことが起こったり、体に自分ではコントロールできない振動があったりと、自分の方を変えることでそれらを受け

入れる調節と関係していると言えそうである。

つまり、行動そのものに笑いが付随しているというよりも、その行動を起こしているときに、主体の中でどういった作用が生じているか、といったことが Smile と Laughter の出現を分けていると言えるであろう。そう考えると、4つの場面カテゴリーに対して、出現の頻度の差はありながらも Smile と Laughter の両方が存在することを説明することができると思う。4つのカテゴリーに分けられた行動は、それぞれ同化と調節のいずれかに関係の強い行動ではあるが、イコールではないからである。例えば、鉄棒で逆上がりができたとする。ここで笑いが出現すると、本研究のカテゴリーでは「達成」に分類される。達成の際には Smile が表出されることが多いが、しかしできた本人にとってそれが意外な出来事であったならば、Smile ではなく Laughter が表出されると予想するわけである。

いずれにせよ、本研究の結果より Smile と Laughter の出現には違いがあることが見出され、またそれは各学年を通して同じ傾向であったことから、2つの笑いは同一直線上の反応の強弱の差であるというより、メカニズムが異なる、別々の反応であろうことが示唆されたと言えるのではないだろうか。今後もさらに、Smile と Laughter は異なるものであるとした視点を持って、心理学だけでなく、大脳生理学や比較行動学といった様々な方面から研究がなされることを希望する。外に表出している笑いが、ヒトの内面でどんなことが起こっているのかを知る一つの手がかりになるであろうと考えるからである。

今後の課題

本研究では、笑いそのものが年齢と共に変化するのではなく、周りの状況とどう関わる能力を持っているか、ということが年齢に応じて変化し、そのことが笑いの出現に影響を与えていることが明らかになった。

また、笑いを Smile と Laughter に分けて見たときに、Laughter は女兒に少ない傾向にあった。これは女兒に Laughter を生じさせるような遊びが少ないことが関係していると考えられた。さらに、Smile と Laughter は行動カテゴリー別に見ると、出現頻度に有意な違いがあり、それらが別々の反応であることが示唆された。

しかし、本研究では自然観察であったために、観察時間20分という点は対象児すべてにおいて統一されていたが、遊び内容やークラスの人数などは統制できなかった。そのために、遊び道具別に見たときなど、その頻度の違いが年齢によるものなのか、それとも携わっている時間の違いによるものなのかがわかりにくくなってしまった。よって、今後の研究においては、その遊びや行動は何回生じ、そのうち笑いはどの程度出現したのか、またその笑いは Smile と Laughter のどちらであったかを、同化と調節の概念も念頭に置いた上で観察することが必要であると考ええる。

(たかぎ・ひろこ)

引用文献

- Bainum, C.K., Lounsbury, K.R. & Pollio, H.R. 1984 The Development of Laughing and Smiling in Nursery School Children. *Children Development*, 55, 1946-1957
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss, Vol1: Attachment*. London: Hogarth Press 黒田実郎ほか(訳) 1976 母子関係の理論Ⅰ：愛着行動 岩崎学術出版社
- Freud, S. 1948 *Gesammelte Werke Bd. XIV* 懸田克躬ほか(訳) 1970 「機知—その無意識との関係—」フロイト著作集第四巻 (pp. 327-421) 人文書院
- Hooft, J.A.R.A.M. van 1972 A comparative approach to phylogeny of laughter and smiling. In R.A. Hinde(Ed.), *Non-verbal communication* (pp.209-241). Cambridge: Cambridge University Press.
- Jones, N.B.(Ed.) 1972 *Ethological Studies of Child Behaviour*. 岡野恒也(監訳) 1987 乳幼児のヒューマンエソロジー—発達心理学への新しいアプローチ プレイン出版
- 正高信男 1995 乳児における笑いの発達 乳幼児研究の現在と未来 (pp. 38-43) 日本発達心理学会比較認知発達分科会
- McForland.D (Ed.) 1981 *The Oxford Companion to Animal Behaviour*. Oxford Univ.Press. 木村武二(監訳) 1993 オックスフォード動物行動学事典 (pp. 626-639) どうぶつ社
- Morreall, J. 1983 *Talking Laughter Seriously*. New York: State University of New York Press. 森下伸也(訳) 1995 ユーモア社会をもとめて—笑いの人間学 新曜社
- 志水彰・角辻豊・中村真 1994 人はなぜ笑うのか—笑いの精神生理学 講談社
- Smith, P.K. & Connery, K. 就学前の子どもの遊びと社会相互作用のパターン Jones, N.B.(Ed.) 1972 *Ethological Studies of Child Behaviour*. 岡野恒也(監訳) 1987 乳幼児のヒューマンエソロジー—発達心理学への新しいアプローチ (pp. 95-136) プレイン出版
- 高橋道子 1995 自発的微笑から外発的・社会的微笑への発達—微笑の内的制御から外的制御への転換をめぐって— 乳幼児研究の現在と未来 (pp. 44-67) 日本発達心理学会比較認知発達分科会
- 友定啓子 1992 乳児における笑いの発達—1歳児から2歳児へ— 日本家政学会誌、43, 735-743
- 友定啓子 1993 幼児の笑いとは発達 勁草出版
- 安田一郎 1984 笑いの表情 現代思想、12 (2), 233-235

付 記

本研究は、高橋たまき教授(故人)の温かいご指導、ご助言のもと作成した修士論文(1995年度日本女子大学大学院人間社会学研究科)の一部を加筆、修正したものです。観察にあたり協力して下さいました、小田原市立桜井保育園の先生方や園児の皆さんに、心より感謝申し上げます。

幼児における笑いの発達

高木 尋子

本研究の目的は幼児（4歳児、5歳児、6歳児）の笑いを、年齢要因、性別要因および状況要因から検討することである。保育園の中での日常生活において比較的長期にわたる自然観察によってデータを収集した。

エピソード分析の結果、①笑いの出現頻度は年齢だけで変化するのではなく、年齢と状況の交互作用があること、②Laughterは女児よりも男児において出現頻度が高いこと、③Smileが出現しやすい状況とLaughterが出現しやすい状況が異なることなどが明らかになった。Smileは社会的挨拶および達成場面で多く出現し、Laughterは社会的遊びと感覚的場面で出現しやすいことから、最後に2種の笑いメカニズムについての議論を行った。

キーワード 【幼児の笑い Smile Laughter 年齢要因 状況要因 自然観察】

The Study of Smile and Laughter in Infants

Hiroko TAKAGI

Key words; Infants, Smile, Laughter, Age, Situation, Natural Observation

The purpose of the present study is to find factors affecting the appearance of “smile” and “laughter” in infants (four-five-and six-year-olds). Data were collected by natural observation method in a kindergarten. The main results of the analyses are as follows.

- ①The appearance of smile and laughter is determined by age, situation and, their interaction.
- ②The appearance of laughter is more frequent in boys than in girls.
- ③Although smile is often observed in the situations of greeting and achievement, the frequency of laughter was higher in those of social playing and feeling.

Also discussed are the two types of mechanism of smile and laughter.